

# 坂口尚と一休展

明治大学  
MEIJI UNIVERSITY

会期 2025年10月25日(土)—2026年2月8日(日)

会場 明治大学 米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館1階



〔前期展示〕2005年10月25日(土)—12月7日(日)

“軌跡”としての「長編三部作」

〔後期展示〕12月13日(土)—2026年2月8日(日)

一休と禅から見出されるもの

〔主催〕明治大学 米沢嘉博記念図書館

〔監修〕飯島孝良(花園大学国際禅学研究所副所長) 横山ひろあき(坂口尚作品保存会午後の風スタッフ)

〔協力〕鈴木賢三(日仏翻訳家・出版ライセンスコーディネーター) ディディエ・ダヴァン(国文学研究資料館教授) 花園大学国際禅学研究所  
酬恩庵一休寺 一般社団法人坂口尚作品保存会午後の風 特定非営利活動法人マンガ作品保存会MOM

〔WEB〕[https://www.meiji.ac.jp/manga/yonezawa\\_lib/exh-sakaguchi-ikkyu.html](https://www.meiji.ac.jp/manga/yonezawa_lib/exh-sakaguchi-ikkyu.html)

©Hisashi Sakaguchi



## 坂口尚 Hisahi Sakaguchi 1946—1995

### 【プロフィール】

1946年生まれ、東京都荒川区出身。高校在学中に虫プロダクションに入社。『鉄腕アトム』『ジャングル大帝』『リボンの騎士』等で動画・原画・演出を担当。1969年に「COM」で漫画家としてデビューし、以後多くの短編作品を発表。代表作として、短編シリーズ作品『12色物語』、長編三部作『石の花』『VERSION』『あっかんべー休』。

生涯にわたってアニメーターとしても活躍し、「24時間テレビ」のスペシャルアニメ『100万年地球の旅 バンダーブック』『フウムーン』では作画監督、設定デザイン、演出など中心的な役割を担う。

1995年、49歳の若さで急逝。1996年「第25回日本漫画家協会賞」で『あっかんべー休』が「優秀賞」受賞。2023年「第50回アンブレーム国際漫画祭」で『石の花』が「遺産賞」受賞。

2023 1996 1995 1993 1991 1989 1983 1980 1979 1978 1973 1971 1970 1969 1964 1946

誕生

17歳

23歳

32歳

37歳

43歳

47歳

49歳

5月5日、疎開先の埼玉県秩父市で生まれる。生後間もなく実家のあった台東区入谷から、荒川区町屋に移り住む。

高校在学中に虫プロへ入社。

『鉄腕アトム』『ジャングル大帝』等で動画、原画を担当。『リボンの騎士』では演出を手がける。(在籍は約4年)

虫プロを退社し、フリーとなってCM等の仕事をする。

大阪万博「少年少女万国博ガイドブック」本文カットを担当

『抵抗の詩』前編、後編(まんが王'80.9月号)ナチス占領下のユーゴスラビアを舞台にした映画『Krasna Brka』(69年・ユーゴ)のコミカライズ作品。描き下ろし(COM増刊号)

『クレオパトラ』(原案/手塚治虫)

初の長編『ウルフガイ』(原作/平井和正)『週刊ぼくらマガジン』に連載(1971年まで)

短編『魚の少年』希望の友'83月号

『いちご都市』COM'8月号

『独立祭の夜』希望の友'8月号

COM休刊後、漫画作品は専作となる。アニメーションの仕事に復帰する。

連載『イラストファンタジイ』『高二コース』

短編『3月の風は3ノット』『少年ワールド』3月号

『星の動く音』『リリカ』3月号

『流れ星』SFマンガ大全集 PART.3

シリーズ『午後の風』『コミックアゲイン』に連載

連載『闇の箱』『劇画アリス』

『24時間テレビ 愛は地球を救う』スペシャルアニメの第三弾『フウムーン』(原作/手塚治虫「来るべき世界より」)監督として、絵コンテ・構成・設定等を手がける。

シリーズ『12色物語』『月刊コミックトム』に連載

短編『星降る夜』『マンガ奇想天外SFマンガ大全集』No.2

『おるごおる』ばぶ'11月号

『小春日和』『漫画族オリジナル』3月号

『冬の月』『漫金超』No.3

『夏休み』『マンガ奇想天外SFマンガ大全集』No.6

『進化』『少年少女SFマンガ競作大全集』PART.16

描き下ろし絵本『無限風船』プロダクション

描き下ろし『電飾の夜23:59発』東京三世社

短編『黄いろのトマト』『SFマンガ大全集』No.2

『金盞花』季刊コミックアゲイン(第1号)

『花火』季刊コミックアゲイン(第2号)

中編『月光シャワー』『W.H.A.T.』2月号

連載『紀元ギルシア』『月刊スーパーアクション』単行本『新版石の花』(新潮社)を大幅加筆して刊行。

この頃に参加した主なアニメ作品

『おさらばしろ!』(1969年)

『クレオパトラ』(原案/手塚治虫)

『抵抗の詩』前編、後編(まんが王'80.9月号)

『鉄腕アトム』『ジャングル大帝』等で動画、原画を担当

『リボンの騎士』では演出を手がける(在籍は約4年)

高校在学中に虫プロへ入社

生後間もなく実家のあった台東区入谷から、荒川区町屋に移り住む

5月5日、疎開先の埼玉県秩父市で生まれる

誕生

17歳

23歳

32歳

37歳

43歳

47歳

49歳

時代社会の出来事

敗戦終戦

第一次ベビーブーム

経済復興

東京オリンピック

東海道新幹線開通

いざなぎ景気

ビートルズ来日

アポロ11号月面着陸

東大安田講堂事件

ベトナム反戦運動

第二次ベビーブーム

あさま山荘事件

沖縄返還

田中角栄

『日本列島改造論』

公害問題深刻化

第二次オイルショック

紙騒動

超能力ブーム

SFブーム

『宇宙戦艦ヤマト』

アニメブーム

『24時間テレビ』放送開始

成田国際空港開港

『スターウォーズ』

マンガ界に『ニューウェーブ』

TV放映アニメ『機動戦士ガンダム』劇場版アニメ

『銀河鉄道999』『エースをねらえ!』『ルパン三世』

カリオストロの城』YMOが大ヒット

インペダーゲーム大流行

イランイラク戦争の開始

『長編三部作』へと至る軌跡

1964-1978

坂口尚は高校在学中の17歳の時に、虫プロの試験を受けて合格。アニメーターとしてキャリアをスタートする。間もなく若手として頭角を表し、『リボンの騎士』では樋口雅一、小林準治氏の三人で作画班を持つことになる。虫プロには四年ほど在籍で退社。フリーとなつてCM等の仕事をするが、永島慎二の勧めでマンガを描き、一九六九年、『COM』に『おさらばしろ!』を発表。漫画家としてデビューする。デビュー時点から作品の完成度は高く、流れるような動きを感じさせるコマ割りや流麗な描線、白と黒の洗練されたコントラストは、読者に鮮烈な印象を残した。

『週刊ぼくらマガジン』に平井和正原作『ウルフガイ』の連載を持つなど、新進の漫画家として評価を高め、『魚の少年』『いちご都市』『独立祭の夜』等の短編の秀作を生み出す。

しかし、『COM』の休刊以後は漫画家としての仕事量が少なくなる。一九七四年頃からアニメーションの現場に復帰。タツノコプロ、東映、日本サンライズ等の制作会社を渡り歩き、安彦良和、富野由悠季、出崎統、金山明博など、虫プロ出身のアニメーターたちと再会し作品制作を共にする。

70年代後半はアニメの仕事が中心となるが、この時期に執筆した『イラストファンタジイ』『しおり』といった作品は、坂口の卓越した画力と独創性が遺憾なく発揮された作品に仕上がっている。マンガとアニメの両軸で様々なジャンルの作品に携わりながら、徐々に自身の表現スタイルを確立させていく。

1978-1983

70年代終わりから80年代始め頃、マンガ界に『ニューウェーブ』の潮流が湧き上がる。従来

の枠組みを越えた新しい表現の場が求められ、『Peeke』『コミックアゲイン』『マンガ奇想天外』『漫金超』といったマイナーなマンガ雑誌が次々と創刊された。それらの雑誌に坂口尚は次々と作品を発表し、再び漫画家としての存在感を高めていく。アニメの仕事も多忙であったが、次第にマンガのほうへ活動の軸を移行していった。

この時期に、数多く短編の傑作を生み出すが、中でも珠玉の短編シリーズ『午後の風』『12色物語』は、代表作のひとつとなっている。何気ない日常風景からはじまるファンタジーから、幻想怪奇、ミステリー、不条理でコミカルなものまで、多彩なテーマを变幻自在に描き出し読者を魅了した。ブラッドベリを想起させる叙情性豊かなSF作品群も評価が高い。

『ニューウェーブ』の潮流は時代の変化と共に急速に終息し、マイナー誌の漫画家たちは『ヤングマガジン』『ビッグコミックスピリッツ』等の週刊青年誌に活躍の場を移していく。アシスタントを使わず、背景まですべて一人で描き上げる坂口尚は、週刊誌ではなく『月刊コミックトム』『W.H.A.T.』等に自身のオリジナルティを発揮できる場を求めていく。

1983-1995

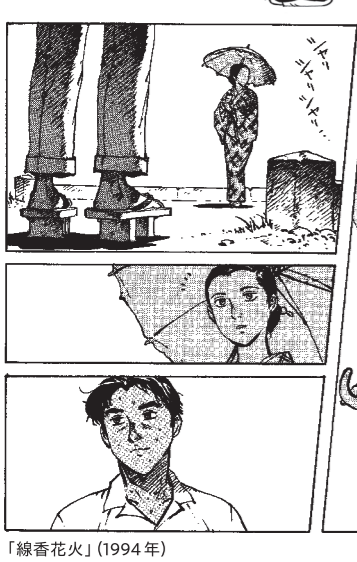
一九八三年、『月刊コミックトム』で『石の花』の連載がスタート。連載は三年半の長期にわたり、劇中でのシリアスな場面が多くなるにつれて、作画のタッチもリアルな表現へと徐々に変化していった。また、人間と社会の本質に迫る重厚なテーマへ果敢に挑み、作中の登場人物たちの対話を通じて多層的で哲学的な思索を深めていく。本作で坂口自身が追い求めた『問い』は、続く長編二作でも共通のテーマとして引き継がれ発展していくのである。

『石の花』脱稿後、次の長編作として『あっかんべえ休』の構想に取り掛かるが、描き下ろし単行本としての計画が途中で頓挫。並行して『VERSION』(89年)の連載をスタートし、一九九一年には手塚治虫原作の短編アニメ作品『安達が原』の監督も務める。その後、『あっかんべえ休』の連載場所が『月刊アフタヌーン』に決まり、一九九二年以降はその執筆に没頭するようになる。

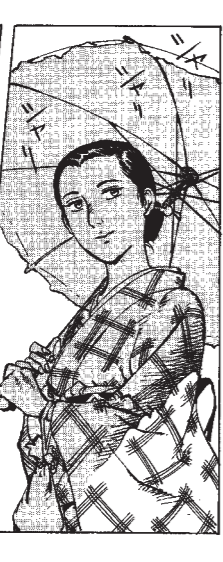
晩年は『長編三部作』が執筆活動の中心となるが、その一方で『黄いろのトマト』『花火』『天の河』といったリリカルな短編作品も手がけている。また、『するをぶっ』『世界文学ハイビジョン』挿画などの作品は、伸びやかな筆致で自由奔放に描かれており、絶えず新しい表現を志向していたことが伺える。一九九五年八月、『ビッグコミック増刊』に発表された『線香花火』が、最後の短編作品となる。

『第25回日本漫画家協会賞』で『あっかんべえ休』が『優秀賞』受賞。

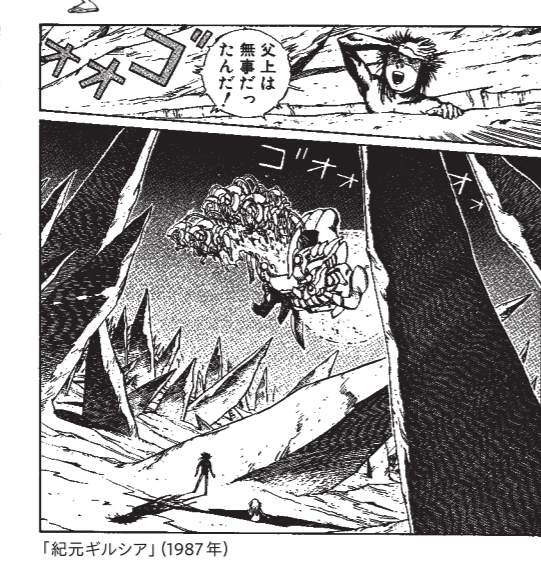
『第50回アンガレーム国際漫画祭』で『石の花』が『遺産賞』受賞。



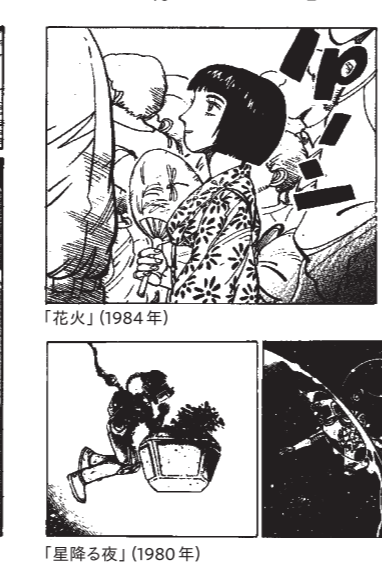
『線香花火』(1994年)



『線香花火』(1994年)



『紀元ギルシア』(1987年)



『星降る夜』(1980年)



『花火』(1984年)



『影ふみ』(1979年)



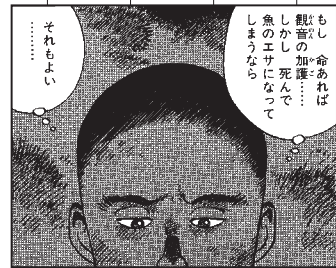
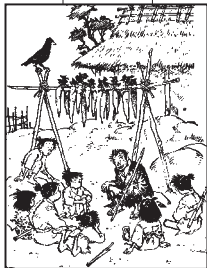
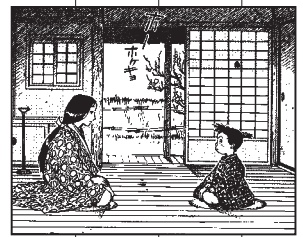
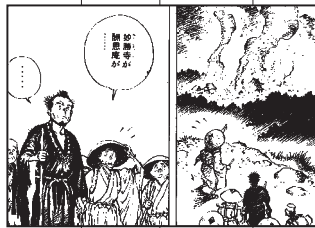
『高田くんの時計』(1977年)



『イラストファンタジイ』(1973~76年)

# 一休宗純の略歴

年号(西暦)	一休の年齢	一休のあゆみ
応永元年 (一三九四)	一歳	誕生
応永六年 (一三九九)	六歳	京都安国寺で出家得度し、「周建」と名付けられる
応永十九年 (一四二二)	十九歳	京都西金寺の謙翁宗為の弟子となり、「宗純」という法名を賜わる
応永二十一年 (一四二四)	二十一歳	謙翁と死別した後、入水自殺を図るが留められる
応永二十二年 (一四二五)	二十二歳	堅田(滋賀県大津市)にある祥瑞庵の華叟宗曇に師事
応永二十五年 (一四二八)	二五歳	「祇王失籠」の琵琶を聞いて公案を会得、華叟から「一休」の号を受ける
応永二十七年 (一四三〇)	二七歳	五月二〇日、闇夜に鴉の声を聞き大悟
応永二十九年 (一四三二)	二九歳	言外和尚三十三回忌に敢えてボロ着で列席して周囲を驚かす。華叟は自らの法を嗣ぐ者として「風狂といわれるが宗純がある」と口にする
永享七年 (一四三五)	四二歳	堺に殴り込みをかけ、朱太刀を腰にしつつ鷹坊主を批判
永享十二年 (一四四〇)	四七歳	推拳により大徳寺如意庵の住職となるも、金品飛び交う喧噪に嫌気がさして十日ほどで退く
文安四元年 (一四四七)	五四歳	大徳寺の一僧自殺、数人が投獄されたため、一休は讓羽山へ退隠し断食するも勅命により下山
康正元年 (一四五五)	六二歳	『自戒集』成る
文明元年 (一四六九)	七六歳	応仁の乱の兵火が薪村の酬恩庵にまで及び、木津を経て奈良へ、更に堺へ出て住吉の松栖庵に寓す
文明二年 (一四七〇)	七七歳	住吉薬師堂に遊び、森女に出会う
文明五年 (一四七三)	八〇歳	刺命により第四七世大徳寺住持となり、戦火に焼亡した大徳寺の復興に着手
文明十三年 (一四八一)	八八歳	十一月二一日、酬恩庵にて入寂



足利義満、征夷大將軍を辞す	おもな事件・できごと
応永の乱	
後小松天皇が称光天皇に譲位	
称光天皇が即位	
蓮如(真宗中興の祖)が生まれる	
大飢饉が発生、翌年まで死者が多数	
日野富子(足利義政の正室)が生まれる	
三条西実隆(公卿・歌人・古典学者)が生まれる	
後花園天皇が崩御	
山名宗全(守護大名)、細川勝元(武将)が相次いで死去	
一条兼良(公卿・歌人・古典学者)が死去	

# 禅宗史略とキイポイント

【A】禅宗以前の「禅」  
「禅」は「瞑想」を意味するサンスクリット語「dhyana」の音写である。仏教が中国に伝来した過程で、瞑想を中心にした教えと実践を広めた人たちの様子は『高僧伝』(五一九年の「習禅」に既に見られるが、『続高僧伝』(六四五年)の「習禅」章に後に禅の開祖とされる菩提達磨が登場する。しかしまだ「禅宗」は存在しない。

【B】原始禅  
菩提達磨を祖とする集団が誕生するが、現在の研究では、達磨よりも慧可が中心的人物であったと考えられている。達磨が慧可に『楞伽經』を授けたとされ、思想的にも大きな影響を与えたことから、二十世紀にこの集団は「楞伽宗」と呼ばれるようになった。

【C】東山法門(後に北宗と呼ばれる)  
七世紀、「東山法門」という集団が誕生した。正当性を強固にするために、達磨まで遡る法系を主張する。自分の心は本来悟っているが、それが煩惱や無明で曇らされており、瞑想でそれらを徐々に払拭するという実践法を説く。

【D】南宗  
八世紀、神会という禅僧がキャンペーンを展開し、達磨から数えて六代目の祖は当時の東山法門の人ではなく、自分の師の慧能だとした。これによって、禅宗は神会がその正統性を主張する「南宗」と、「北宗」と呼ばれるようになった東山法門に分裂する。その後の禅宗は、主に「南宗」につながるものとなる。「南宗」では、煩惱を徐々に払うのではなく、自分が悟っていることにすぐに気づくことを目指す。

【E】「初期禅」から「唐代禅」へ  
八世紀に「南宗」の思想が展開し、馬祖道一(七〇九―七八八年)によって禅が新しい時代に入る。この時代は「唐代禅」と呼ばれている。唐朝は六一八年に始まるが、「唐代禅」は馬祖以降の禅を指す。

【F】馬祖禅と「即心是仏」  
馬祖の教えはいたってシンプルであり、「即心是仏」(ありのままの自分は既に悟っているということ)である。そして、馬祖がどう悟ればいいのかを説いただけではなく、実際に人々を悟らせたことが革新的だった。同時代から批判もあったが、その賛否にかかわらず、最終的には馬祖禅が「唐代禅」の大前提となっていた。

【G】語録  
禅について伝えるテキストは多種多彩であるが、なんといっても代表的なものは「語録」(禅僧の言行録)である。特に馬祖以降、「唐代禅」の語録が禅の古典となっていく。馬祖がひとつの転回をもたらしたからである。馬祖以前、禅籍を含めた仏典の多くは「どうすれば悟れるか」を説明するものであった。これに対して、馬祖以降の語録では大きく異なるパターンとなった。主なものは、「〇〇和尚が◆和尚をこのように悟らせた」といった形式になったのである。活き活きとした唐代の語録は、今日に至るまで禅の基本コーパスになっており、当然ながら一休もしばしば言及している。特に、語録の傑作とされている『臨濟録』が重要な位置を占め、一休も重視していた。

【H】勝ち残った臨濟宗と曹洞宗  
馬祖は禅の基盤を築いたが、唐代禅全体が馬祖禅であったわけではない。馬祖禅はそもそもはいくつかがある宗派のひとつであって、馬祖禅への批判や展開によってさらにいくつかが宗派が生まれた。

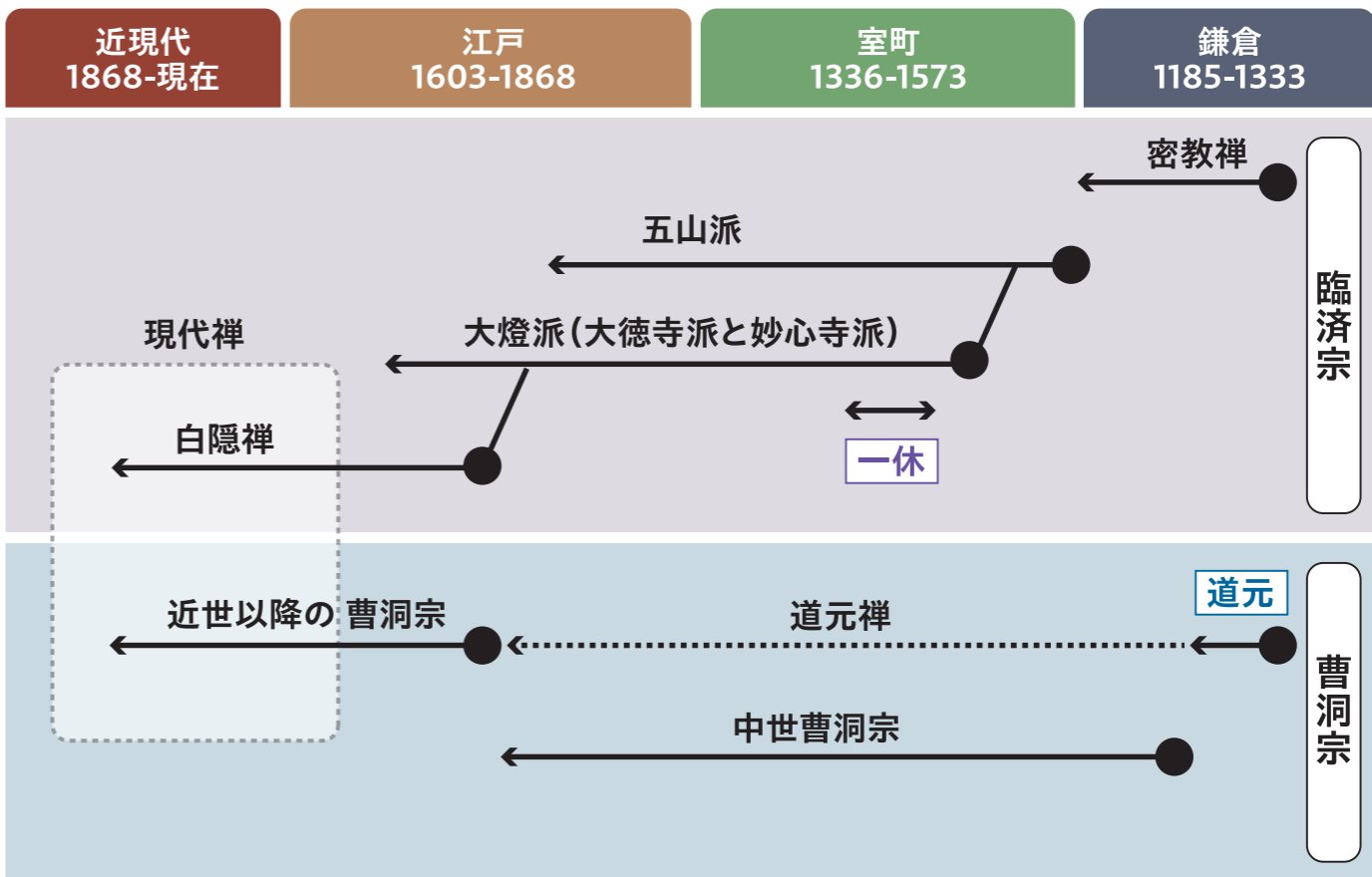
宋代になると、禅を五つの宗派に分類するようになる。つまり、沩仰宗・臨濟宗・曹洞宗・雲門宗・法眼宗である。最終的に残ったのは、圧倒的な勢力をもった臨濟宗と、細々と存続した曹洞宗であった。他の宗派は表舞台から姿を消したが、その禅僧の影響が臨濟宗にも曹洞宗にも感じられる。一休は臨濟宗の禅僧ではあるが、他の宗派の僧にもしばしば言及する。

【I】語録から公案へ  
唐代禅の代表的なテキストは、あるひとりの僧の言行録というべき「語録」であったが、宋代禅ではそれぞれの禅僧に関する代表的なエピソードが独立して「公案」と呼ばれるようになった。公案は、禅問答の実例や、禅師が修行者に示す課題などから成る。その公案を題材に行われた説法がテキストトとなって、『碧巖録』のような著名な禅籍となった。

【J】臨濟宗の看話禅  
公案はさまざまな形で用いられたが、後に禅の実践の基本になったのは、いわゆる「看話禅(かんなげん)」である。修行者は、理性を用いずに公案に全身全霊で集中し、悟りを目指すのである。看話禅の生まれ過程は長く、いくつもの宗派の禅僧の思想が影響したが、最終的に臨濟宗において完成して広まった。一休の修行の基本も、この看話禅であった。

【K】曹洞宗の黙照禅  
曹洞宗の教えを端的にまとめるのは難しいが、後の日本に大きな影響を与えたのは、いわゆる「黙照禅」である。「黙」は坐禅を指し、ひたすら坐禅すれば本来の悟っている心が自ずと照らされる(顕現する)という考えである。これが道元禅師の教えの中心となり、日本の曹洞宗の基盤となっている。

## 日本の禅



### 臨濟宗のさまざまな流れ

中国から来た禅は、当初から日本の特徴を帯び、大まかに左のような展開をみせた。

#### 1 密教禅

鎌倉時代、仏教界では密教が非常に盛んであり、新しい教えというべき禅が伝来された際も、当然ながら密教的な枠で解釈された。そのため、栄西(一二四―一二五年)や円爾(一二〇―一二八〇年)などの日本の禅僧は、密教と禅を組み合わせており、これが鎌倉時代には主流であったといえる。

#### 2 五山派

蘭溪道隆(一二三―一二七八年)が二四六年に来日したのをはじめ、多くの渡来僧と留学僧が中国の禅をもたらした。南北朝時代、中国にならって五つの寺院をトップにした「五山制度」が成立した。室町時代を中心に絶対的な勢力を持ち、臨濟宗のなかで支配的な位置にあった。

#### 3 大燈派

大燈国師(宗峰妙超、二八二―三三七年)が新しい禅を確立し、大徳寺を建立した。弟子の関山慧玄(二七七―三三〇)は妙心寺を開いたことで知られる。室町末期からは、大燈派が徐々に力を増し、五山派の衰弱により主流となった。現在は臨濟宗の全てが大燈派に遡る。

#### 4 白隠禅

沼津の白隠慧鶴(二六八―一七六八年)が、独自の禅思想と実践法を指導していき、これが全国規模で広まった。法系上では、現在の臨濟宗はすべて白隠に遡る。

### 曹洞宗の途切れた歴史

曹洞宗は、道元(二〇〇―二五三年)によって日本にもたらされた。最大の特徴は、臨濟宗の基本的な実践である「看話禅」によって悟りを目指すのではなく、ひたすら坐禅していれば(只管打坐)、悟りが自ずと現れるというものである。

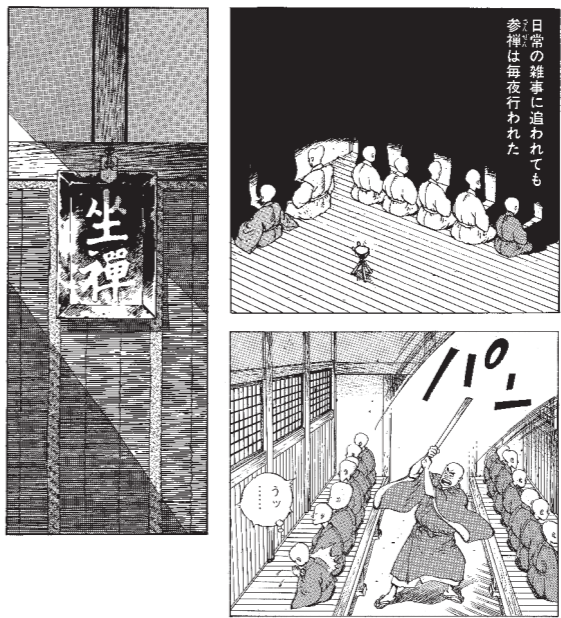
道元亡き後、曹洞宗は方針転換し、「看話禅」を基盤にした修行法へ移行した。江戸中期になって道元の教えに戻るようになり、現在の曹洞宗も道元禅を基本思想にしている。

# 一休が生きた中世日本禅の環境

**エリート僧たちが悟りを目指す**  
 臨済宗の場合、禅の修行は悟りを開く事を目指している。ただし、実際に悟れる人はわずかな人数であって、僧のエリートコースであった。一休はそのひとりであった。

## 坐禅

坐禅は禅宗のみならず、仏教全体のも基本的な修行のひとつである。曹洞宗では坐禅そのものが悟った心を顕現させるのに対して、臨済宗では看話禅のなかで悟りへ到ろうとするための重要な修行の手段となっている。



## 看話禅

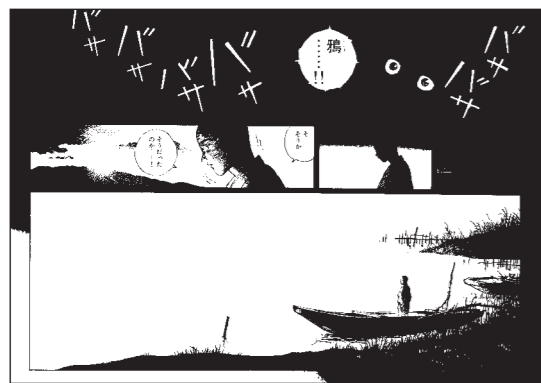
語録や公案集にある逸話や問答などを「話頭」とし、修行者がこれを「看る」ことで集中するのが「看話禅」である。中国では、公案を通ると悟るとされているが、日本では複数の公案について修行することになった。「休和尚年譜」には、一休が向上した公案が幾つか登場しており、『あっかんべえ一休』には「洞山三頓棒」という公案にまつわる重要な修行法が描写されている。



## 印可状

弟子の悟りを認められた師が「印可状」を与えることされている。実際、いつからそうする事になったのかは定かではない。中国にはその痕跡がなく、一休の時代前にも確認されていない。一休は印可状を拒絶する姿勢をみせたが、これはいわば、印可状が新しい慣習として現れだし、批判すべきものと思われた可能性がある。

『あっかんべえ一休』で描かれているように、印可状は僧侶だけではなく、在家にも与えられていた。一休が強く批判していたのは、悟っていないのに布施代わりに与える僧がいる点であった。印可状があれば住職になれたという訳ではないが、室町末期から印可状は益々重視されて、禅僧の出世に必須になったと考えられる。



## 臨済宗の禅寺

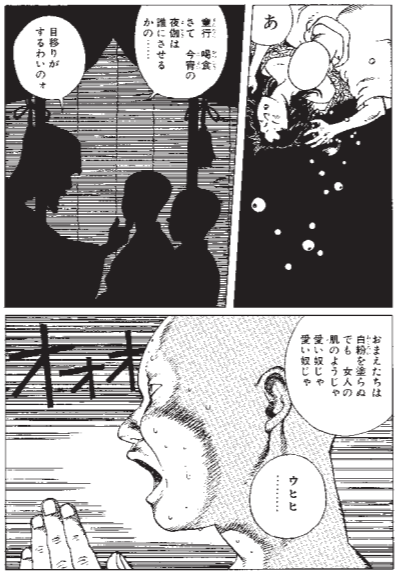
### 半僧半俗

禅寺に通う人には、半僧半俗の男女もいた。出家しているか否かはつきりしないが、一休の弟子と等しい程度に寵愛を受ける者もみられた。



### 俗塵まみれの禅寺

禅寺は修行と教育の場であったが、同時にさまざまな身分の者が大勢住んだり出入りしたりする社会的な空間でもあった。



### 鎌倉と室町の五山十刹

五山制度によって、臨済宗は幕府の厚い支援を受けていた。鎌倉と京都に大規模の禅寺が建立され、渡来僧をはじめとして高僧が住職となった。中国との密接な交流で、大陸から最新の学問を輸入することとなり、文学（特に漢詩）が大いに流行った。こうした流行は「五山文学」といわれ、作詩に溺れるあまり、禅の修行を疎かにした僧も大勢いたほどであった。禅寺は最高水準の育成の場でもあって、現代の大学のような役割を果たしていた。五山で教育を受けた一休が漢学に長けていたのはそのためである。



**乱世の中の蕩尽**  
 幕府の恩恵に浴していた五山の寺院は、たとえ戦乱の世に飢饉が蔓延していても、贅沢な生活を続けることがあり得た。禅僧のなかには、酒や色ごとに溺れる者が少なかつた。

